

＊この資料は2002～4年に教会の月報に連載した「日本語讃美歌の詩について」からの抜粋です。2000年から段階的に導入した『讃美歌21』の歌詞を検討した中で、ヒムエクスプロージョンに関わる部分をeラーニング用に抜粋しました。 中山信児

13. 『讃美歌21』の歌詞 その2

『讃美歌21』には、今まで日本の讃美歌集になかったような讃美歌が多く収められています。「まえがき」の表現をそのまま借りると「平和と正義、人権、秘蔵世界の回復・統合、差別等々の現実の諸課題に立ち向かう福音の証しの歌」ということになりますが、それらの新しい讃美歌の多くは「一致・革新・連帯」（409-421番）、「正義・平和・被造世界」（422-429番）の二つの項目に収められています。この二つの項目にある讃美歌で古い『讃美歌』にも収録されていたのは2曲だけ（411番と412番）ですので、ほとんどが私たちには耳新しい曲ということになります。

「正義・平和・被造世界」という主題は、1980年代から「世界教会協議会（WCC）」で取り上げ始めたテーマですが、私たち福音派の間でも1974年のローザンヌ会議で既にこの問題に関心が向けられていました。ただ、この主題を扱った讃美歌をまとめた形で収録した讃美歌集は、日本ではあまり見あたらず、広く用いられている讃美歌集の中では『讃美歌21』が初めてであると言ってよいでしょう。

その中から、ヒム・エクスプロージョンの代表選手でもあるブライアン・レンの作詞による「キリストの腕は」413番を取り上げてみましょう。この曲は「一致・革新・連帯」の項目に入っていますが、敵意と争いによって分断されたこの世界にあっても、キリストが「文化も生まれもすべて越えて・・・思想や隔たり関わりなく・・・世代、民族の壁を砕き」私たちを愛し受け入れてくださることを歌っています。レンはこの曲を、ローマ人への手紙15章7節の「こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい」という聖句をもとにして書き上げました。「私たちも違いをよるこび受け入れ合おう」という歌詞は、クリスチャンがどのように主の愛を表すことができるかをシンプルに力強く示しています。

「正義・平和・被造世界」の項目では、やはり平和というテーマが、ほとんどすべての讃美歌で取り扱われています。その中で、フィリピンのフランシスコ・フェリシアーノの作詞による「ああ、美しい自然」427番は、「美しい自然、すばらしい世界、みごとな調和の宇宙」を創造された神さまのことを歌い、その神さまを「たたえ歌うとき、平和がある」と結んでいます。ただフェリシアーノがフィリピン人であること、反戦讃美歌「おやすみよ」374番の作曲家でもあることを考えあわせると、この美しい詩の背後にも現実世界の悲惨や苦悩を見、唯一の解決として、すべてを造られた神さまに目を向けるべきでしょう。

14. 「『讃美歌21』の歌詞 その3

『讃美歌21』には現代の世界の讃美歌創作と研究の成果が意欲的に取り込まれています。讃美歌創作というと20世紀後半に起こったヒム・エクスプロージョン（讃美歌創作の爆発的なムーブメント）がまず思いおこされますが、他にテゼ共同体やアイオナ共同体でも精力的に新しい讃美歌が作られており、日本にも楽譜やCDを通して紹介されています。

さて、そのような動きの中で今回取り上げたいのはイギリスのジュビラテ・ヒムというグループです。このグループは1966年に英国聖公会のマイケル・バウンがティモシー・ダドリー・スミスと協力して、若者のための讃美歌集 "Youth Praise" を作ったところにその始まりがあります。その後、多くの協力者、賛同者を得て "Youth Praise2"(1969), "Psalms Praise"(1973), "Hymns for Today's Church"(1982), "Sing Glory"(1999)といった讃美歌集を出版しています。

『讃美歌21』には、このグループの中から、ティモシー・ダドリー・スミス（174、201、373番）、クリストファー・アイドル（491番）、マイケル・ペリー（182番）、マイケル・セイワード（158番）といった人たちの詩が収録されています。彼らは聖公会の中でも福音的な信仰に立ち、聖書を大切にしている人々です。上記の讃美歌も491番が中世の修道士アルクインの祈りをもとにしており、以外は、みな聖書から直接題材をとっています。

福音的な信仰は、時に、保守的で時代の変化に無関心と批判されることもありますが、それはむしろ変わることのない神のみことばの力に信頼しつつ、絶えず移り変わる時代や世界の流れの中で、揺るぎない土台に立とうとするものです。その聖書のみことばを讃美歌の歌詞として整えようとするとき、作詞者は-意図するしないとに関わらず-みことばと会衆との間の一つのフィルターを担います。作詞者の役割は、よいフィルターとして、その時代、その国の会衆に神のみことばを最もふさわしい形で仲介することです。20世紀後半に、そのような役割をもっとも福音的な良い形で担ったのがティモシー・ダドリー・スミスと彼の影響下にあるジュビラテ・ヒムの面々です。

ジュビラテ・ヒムのレポーターがまとめた形で日本に紹介されたのは『讃美歌21』が最初ですが、将来日本の福音派の讃美歌集が編集される際には、海外のムーブメントや団体の中では、まずジュビラテ・ヒムの業績が参照され、そのレポーターが取り入れられるべきです。

15. 『讚美歌21』の歌詞 その4

『讚美歌21』の112番「イエスよ、みくにに」は、テゼ共同体の讚美歌です。テゼの曲は讚美歌21に何曲か取り上げられていますが、これはその中で私が最も好きな曲です。歌詞はルカの福音書23章42節の「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください」ということばがほとんどそのまま使われています。このことばは、イエスさまと一緒に十字架につけられた犯罪人の一人が、その人生の最期にイエスさまへの信仰と悔い改めをもって告白したことばです。このことばを敬虔な心で何度も繰り返して歌うとき、私たちは自分がこの犯罪人と同じように罪人であることに気づかされ、私たちの心にも、この犯罪人のようにイエスさまに「私を思い出してください」と祈るまったき信頼が溢れてきます。

日本語に編集されたテゼ共同体の歌集『すべての人よ 主をたたえよ』（サンパウロ）の前書きには次のように記されています。「歌は礼拝を支えるとても大切な要素です。短いみ言葉を何回も繰り返し歌うことによって、祈りは深められてゆきます。神への信頼や信仰の真実を端的に表現する短い歌詞、それを何回も繰り返し歌うことによって、その真実が私たちの存在のすべてを貫いてゆきます。」

深い意味の込められた短いことばは、私たちの思考にではなく感性に、頭にではなく心に働きかけます。このような讚美は、説教よりも敬虔な祈りに似ています。これも讚美の一つの働きです。

ところで、短いことばのくり返しというと、プレイズ&ワーシップソングにも同じような形の讚美歌が多くあります。けれども外面的な類似以上に、両者には本質的な違いがあります。プレイズ&ワーシップソングが歌う者の心を外に向かって解き放そうとするのに対して、テゼの讚美は私たちの存在の深みに神の恵みをもたらしよう働きをします。讚美歌を選ぶときには、そのような働きや性格の違いについても考えることが大切です。

ところで歌詞の問題と少しずれるのですが、『讚美歌21』では、この美しい曲が「葬儀」の項目に入れられています。これは大変残念なことです。『讚美歌21略解』には「祈りの応答、特にざんげの祈りやとりなしの祈りの応答として、また聖餐式でも用いることができるでしょう」とありますが、「葬儀」の項目に分類されたために、この曲が歌われる機会がずいぶん失われたのではないのでしょうか。讚美歌の分類項目についても考えさせられる一例です。